

全教職員参加の研修で、育てたい生徒像を討議。 SP策定の過程で教員間の話し合う風土が醸成

安房高校（千葉県立）

地域からの期待を担う 伝統校が育成すべき力とは

千葉県南部に位置する安房高校は、120年以上の歴史と伝統をもち、進学指導重点校として地域からの期待を担い続けてきた。

「地域の方とお話をする」と「安房高は安房高であり続けてほしい」と皆さんおっしゃるのです。2020年度に校長に着任以来、その意味を考え続けてきました（石井浩己校長）

創立以来の校訓は「質実剛健・文武両道」。「文武両道」を石井校長は学習と部活動の両立だけではなく、謙虚さや他者を敬う心、向上心など、学びへの向き合い方も含まれると考えている。また、「質実剛健」は人としての美しさ、品性と捉えた。

「例えば本校の生徒たちは気持ちよく挨拶をしたり、体育館前に上履きをきれいに揃えることが習慣化されています。小さなことですが、こうした品格が表れる部分を地域の方々をよく見ていらつしゃいます。安房高らしきとは、学力だけではない人としてのあり方も期待されていると受け止め、それを守

り続けることを学校内外で発信してきました」（石井校長）

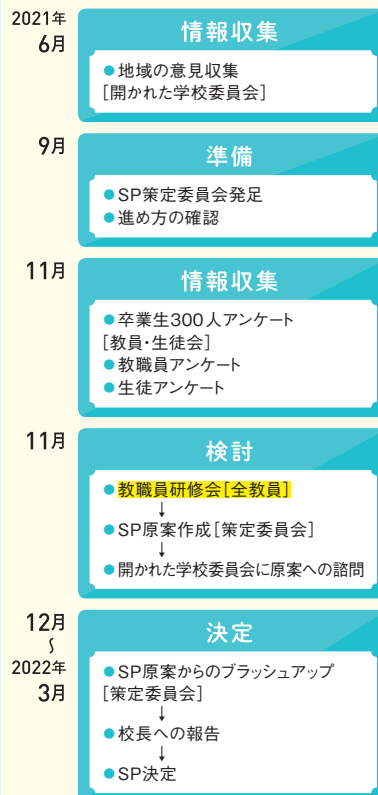
そして2021年度に入ると、文部科学省からスクール・ポリシー（以下SP）の策定が通達され、「安房高らしき」を明文化する機会がやってきた。同校ではSP策定委員会を設置し、中堅の木戸一平先生を委員長に任命。9月にSP策定委員会がスタートした。

ICTを駆使し関係者の声を 広く、深く見える化

委員長を任された木戸先生は、ベテラン、若手のバランスを考えて8名の教職員からなる策定委員を選定。千葉県教育委員会が作成しているSP策定のための様式に従って、既存の満足度調査や新規のアンケートから学校関係者の意見を集め、情報整理をすることとした。

地域からは従来、学校に設置されている「開かれた学校づくり委員会」で定期的に学校への意見を聞く機会を設けており、その場で出た学校への期待を整理。石井校長が感じている通り、安房高生としての品格を求める声や、都心の進学校には負けないプライドも

安房高校の スクール・ポリシーの策定プロセス



期待されていた。

「以前の校長が本校を『鋸山の南の小さな生意気な学校』と称しました。東京の隣接県でありながら、地理的には都心が遠く感じられる場所にあります。けれど、世界に出ていこうとする意志をもった卒業生を大勢輩出しており、そうしたチャレンジ精神も期待されていると感じています」（木戸先生）

生徒の思いについては、改めて現役生や卒業生に自由記述のアンケートを実施。安房高校に期待することや身につけたい力などを尋ねた。若手教員のアイデアで、アンケートに出てきた言葉をテキストマイニング（文字列を単語や

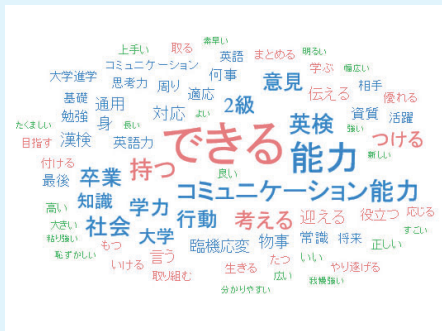
文節で区切り、頻出度などから有用な情報を取り出す分析方法）し、ワードクラウド形式で声の見える化を図った（左写真参照）。さらに、前生徒会長がGoogleのフォームでアンケートを作成し、卒業生にSNSで拡散。「学習」「部活」「その他（生活面など）」について尋ねた30項目以上に対して300名の卒業生から集まった回答を集計した。

そこから見えてきたのは、生徒たちが、社会に出てから必要となる力をつけるために学びたがっているという姿だった。「我々教員側は、生徒につけたい力をリーダーシップやコミュニケーション能力など、抽象的な言葉で表現しがちでした。



(左から)元スクール・ポリシー策定委員会委員長 木戸一平先生、校長 石井浩己先生、教頭 渡邊嘉三先生

●生徒アンケート
「卒業するときもっていたい資質・能力」



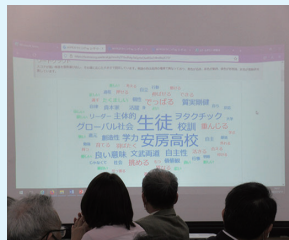
生徒の自由記述をテキストマイニングしたもの。「できる」「能力」「社会」「行動」「英検2級」など、生徒たちからは将来を見据えて身につけたいキーワードが目立っていた。

●全教職員が参加した研修



地域、生徒、卒業生からの声を基に、教職員が考える育てたい生徒像や資質・能力を討議。世代別のグループで若手も積極的に発言できた。

生徒アンケートのテキストマイニングをスクリーンに投影して共有。ワードクラウド形式は、多かった言葉が大きな文字で表れ、生徒の気持ち伝わりやすい。



●安房高校のSP

ダウンロード可

〈育てたい生徒像〉

知的好奇心をもち、主体的に学び、考え、行動する生徒

〈GP〉

- 学びの徒としての謙虚な姿勢
- 礼節を重んじ他者を尊重する精神
- リーダーとして求められる人間力

学校データ

1901年創立／普通科(単位制)／生徒数707名(男子358名、女子349名)、創立120年を超える伝統をもち、千葉県で最初の「教員基礎コース」が設置され、卒業生の多くが県内外で教職に就いている。

でも生徒や卒業生からは『グローバル』
『通用する』『能力』など、多様な社会での活躍を見据えた言葉が多かったのが予想を超えていました(木戸先生)

**教員の声を吸い上げるため
全員参加の研修会を実施**

生徒や卒業生の声を踏まえ、教職員にもアンケートを依頼したが、任意としたため回答率が2割にも満たなかった。多忙を極める教職員の意見をどうしたら聞くことができるか。策定委員会の先生たちは考えた末、全員参加の研修会を設定することとした。

2021年11月に実施されたスクール・ポリシー策定のための研修会では、テキストマイニングした生徒や卒業生の声を基に、安房高で育てたい生徒像、生徒に身につけてもらいたい資質・能力について討議。若手も意見を出しやすいうよう、世代別のグループに分かれてデ

イスカッションを行った。出てきたキーワードを集め、それらをさらにテキストマイニングしていった。

**教員が迷ったときに
よりどころとなる憲法がSP**

学校関係者たちから集まった声を、SPとしてどのような表現に集約させていくかが、最も難しい作業だった。「改めてSPの位置づけとは何なのかを考えました。SPは、すべての教育活動を検討する際の基準であり、また、仕事の優先順位をつけるうえでもよりどころとなる憲法である」と、校長とも確認しました(木戸先生)

ただし、全教科、全学校活動のよりどころとなり得る言葉に落とすには、抽象的、一般的な表現になりがちなのが策定委員の先生たちの壁となった。国語科の先生にも協力を仰ぎ、表現を練った。表現よりも、策定過程でさまざまな

声を吸い上げたこと、そこで悩みながら練り上げたことが大事だという共通認識の下、「育てたい生徒像」として「知的好奇心をもち、主体的に学び、考え、行動する生徒」を軸とするSPを決定した。外せなかったのは「知的好奇心」。生徒が成長していくうえで、自前前に進む原動力となる資質であるからだ。各授業でも知的好奇心を刺激することを意識してほしいという思いが込められている。

グラデュエーション・ポリシー(GP)は、校訓である「質実剛健・文武両道」を現在の状況に置き換えた「学びの徒としての謙虚な姿勢」「礼節を重んじ他者を尊重する精神」「リーダーとして求められる人間力」と定めた。カリキュラム・ポリシーの中に「安房の子は安房で育てる」という文言を組み込んだところに、地域からの期待に応えるプライドが表れて見える。

**SPを考える過程で、
教員同士の意見交換の風土が**

安房高校のSPはこの3月末にできあがったばかり。しかし、策定する過程で委員会の議事録を毎回配付していたことで、「SPって面白そう」と興味をもつ教職員が出たり、SPについて職員室で会話がなくなるなど、意見を言い合える風土ができてきた。

さらに、全員参加の研修会で育てたい生徒像を話し合った経験から、「思考力を育てるにはどうする?」など、教科ごとに授業づくりについて相談し合う姿も増えてきている。

「やる気が強い教員集団であるほど、それぞれが向く方向がバラバラになりがちです。SPは『安房高校の教員としてできること、すべきこと』という同じ方向を向くための道標となると期待しています(渡邊嘉三教頭)